

R. アミタイ・ブレイス著

モンゴルとマムルーク：
マムルーク朝—イルハン国戦争，1260—1281年

中町 信孝

13世紀後半から14世紀初頭にかけての西アジア・イスラム世界は、大きな転換期を迎えていた。1258年のモンゴルによるバグダードの征服により、すでに名目ばかりとなっていたとはいえ、理論上イスラム世界全体を統括する権威であったアッバース政権が消滅した。旧秩序の崩壊後、新たな秩序の担い手として西アジア世界に登場したのは、アッバース政権を倒してイランを中心とする地域に成立したイルハン国と、アッバース・カリフ家を迎え入れてシリア・エジプトに成立したマムルーク朝の二大勢力であった。両勢力の衝突は、1260年のアイン・ジャーロートの戦いから1323年に和平が結ばれるまで、およそ60年間にわたった。

この本の著者アミタイ・ブレイスはマムルーク朝の研究者であるが、両勢力間の争いに注目し、本書において「マムルーク朝—イルハン国戦争の政治・軍事史」という新たな研究分野を構築しようとしている。むろん従来も、マムルーク朝とイルハン国の関係史を扱った研究はなかったわけではなく、著者自身も序章において、D.アヤロンのモンゴル・ヤサをめぐる一連の研究や、P.ジャクソン、J.M.スミスらのアイン・ジャーロートの戦いに関する研究を先行研究として紹介している⁽¹⁾。しかし、本書のように両国関係史を第一義的にとらえ、両国関係の様々な局面を包括的に扱った研究はこれまで類書を見ない。

本書で扱われる時代は、60年におよぶマムルーク朝—イルハン国戦争の歴史において、初期の20年間のみである。このような時代設定を行なった積極的な理由を本書中に見出すことはできないが、序章でも述べられているとおり、著者がこの60年間全体を見通す展望を持っていることは明らかである。

以下に本書の概要を眺めてみよう。

まず序章において、問題提起、先行研究および史料の紹介がなされた後、第一章「歴史的背景」では1260年以前の西アジア世界を取り巻く状況が概観される。モンゴル側に関しては、チンギスハーンからフラグに至る西アジアに対する征服活動と、それを支える帝国イデオロギーが述べられる。

モンゴルの帝国イデオロギーについては、天から与えられた使命としての世界征服の観念と、遊牧国家の宿命としての膨張主義が結合したものであると説明され、著者はこのような理念は少なくとも、モンゴルの支配者層の間には確実に浸透したはずであり、その後の両勢力の戦争が続く原動力となったと指摘している。一方モンゴル軍を迎えるシリア・エジプトの側に関しては、1250年のマムルーク朝の成立およびその草創期における混戦状況が概観される。

1260年、マムルーク朝とモンゴル軍は、アイン・ジャールートにおいて初めて戦戈を交えるが、この時の戦闘に関しては第二章「アイン・ジャールートの戦い」において綿密な考証が行なわれる。まず、1259年の時点でアレppoまで進軍していたフラグが、戦闘の直前に急遽撤退したことに關しては著者は、シリアにおける牧草地の不足が原因であったとするD.モーガンの説を退け、大カーン・モンケの死にともない、キプチャクハン国に対して北西イランの地の領有権を主張する必要性が生じたためであるとするP.ジャクソンの説を採用する。その後著者は、開戦に至るまでの過程を詳述し、双方の史料から両軍の兵の総数を比定、さらに地形までを考慮に入れて両軍の戦術と戦況の推移を再構成するが、このような戦闘に関する分析の綿密さは本書の特色の一つとなっている。また著者は、アイン・ジャールートにおけるマムルーク朝側の勝因を、スルタン・クトゥズの指導力と、当初モンゴル側に与していたホムスのアイユーブ家君主アシュラフ・ムーサーが戦線を離脱したこととの二点に置いている。これらの理由のうち後者は、両軍の主力を担っていた騎乗射手 (mounted archers) の数こそが最終的な勝敗を決定したという見方であり、著者の議論がマムルークとモンゴルという二つの集団の同質性を前提としていることが分かる。こうした、マムルークとモンゴルの間の差異よりも類似を強調する論調は、本書全体を通じて頻繁に見受けられ、後述するように著者の主張の根幹をなすものであると言える。

続く第三章「反イルハン国政策の定式化」では、まずバイバルスがスルタン位についた直後に起こった第一回ホムスの戦いとその当時のシリア情勢が概観される。第一回ホムスの戦いに関しては、戦闘の規模は小さかったものの、この戦いでマムルーク軍の勝利が、アイン・ジャールートの戦いに引き続きモンゴルの不敗神話を覆し、マムルーク・システムの優勢を裏付けたという、象徴的な意味を持っていたと説く。そして、その後スルタン・バイバルスの国内政策、すなわち、エジプトにおけるアッバース家カリフの推戴、シリアのウルバーン ('urbān, トルクメンなどの遊牧民に対する政策、ワーフィディーヤ (wāfidiyya) の受け入れやマムルー

クの購入による兵力の増強やバリエーション網の整備など軍事機構の編成について分析を加えている。

批評と紹介
中町

第四章「第二の戦線を求めて」では、当時の西アジアを取り巻く主な勢力とマムルーク朝、イルハン国との関係が、両国の外交戦争という文脈で分析される。特に本章の前半部分では、キプチャクハン国とマムルーク朝及びイルハン国の三者関係について論じられている。イルハン国とキプチャクハン国が敵対関係にあった一方で、マムルーク朝にとってキプチャクハン国は若い奴隷軍人の供給地にあたり、両国が同盟関係にあったことはよく知られている。しかし著者はここでD. アヤロンの説にしたがいが、実際に共同作戦がとられたわけでもない両国の関係を誇張して語ることに注意を払っている。また奴隷の輸入ルートの中継地点であるボスポラス海峡を握ると同時に、互いに敵対するキプチャク・イルハン両国と境を接していた、ビザンツ帝国の緩衝国的な立場にもふれられている。一方イルハン国とヨーロッパ勢力との同盟関係については、イルハン国側からの積極的な働きかけにも拘らず両者の間に何の具体的成果も生じ得なかったのは、両者間の地理的距離が甚大であったことや、ヨーロッパ側が海外領土であるシリアの十字軍諸国に対し当時すでに関心を失っていたことが原因であると論じている。

第五章「軍事的・外交的衝突」では1262～77年の両国間での軍事的・外交的衝突が、時間軸に沿って概観される。実際に両者の間で大きな戦闘の無かったこの時期を、著者は「冷戦」状態として捉えており、特に1. 繰り返される国境侵入などの相互干渉、2. 両国の間における小アルメニア王国の役割、3. モンゴル領からの亡命者「ワーフィディーヤ」の存在、4. シリアの十字軍諸国の役割、といった着眼点を設けて論を進めている。さてこの章の末尾で著者は、マムルーク朝側史料がこの間の国境戦争や外交戦略、さらに敵国であるイルハン国の内情までを詳しく記述している一方で、イルハン国側の史料にはこれらがほとんど記述されていないという事実を指摘している。このような史料記述の不均衡を説明するものとして著者が挙げるのは、マムルーク朝－イルハン国戦争に対する双方の重要度の置き方の違いである。すなわちマムルーク朝にとって対モンゴル戦はまさに死活問題であり、たった一度の敗戦さえも許されない状況だったのに対し、北のキプチャクハン国、東のチャガタイハン国とも争っていたイルハン国にとっては、対マムルーク朝戦は数ある戦線のうちの一つに過ぎず、マムルーク朝ほどにこの戦争を深刻にとらえてはいなかったというのである。このように、両国のスタンスの違いを考慮に入れることによって著者は、ある史料が沈黙して語ろうとしなかったことまでも分析の対象とする

第七十八卷

八五

ことに成功している。

著者の既刊論文に基づく第六章「諜報戦」は、両国関係をスパイ活動や諜略という側面から捉えたものであり、この章だけで独立したテーマを扱っているという点で非常に興味深い。バイバルスが諜報組織を活用していたことは有名であるが、ここではクッサード (quṣṣād) と呼ばれる諜報員の職務や組織の管理について考証され、またクッサード以外の諜報活動も言及される。一方モンゴル側の諜報活動は、マムルーク朝史料から見る限りあまり芳ばしい成果をあげていない。このような違いは、第五章で述べられているような双方のこの戦争に対する重要度の違いによっても説明されうが、マムルーク朝がイルハン国領内のムスリム住民の協力を得やすかったという点も指摘される。

第七章「バイバルスによるルーム・セルジューク朝への干渉」では、バイバルスとルームとの関係を取り上げる。641/1243年のキョセダグの戦い以降モンゴルの間接統治を受けていたルーム・セルジューク朝に対し、バイバルスは早い時期から関心を示しており、ルームの宰相ペルヴァーネとも接触を持っていたが、バイバルスの死の前年に行われた675/1277年の大規模なルーム遠征については、彼が実際に何を意図していたのかは従来明らかにされていなかった。著者はこのことに関して、バイバルスが実際にルーム・セルジューク朝の征服・支配を意図していたとの可能性も認めつつも、それよりはむしろ、単なるモンゴルに対する後方攪乱あるいは大規模な軍事演習であったという説の方に重きを置く。さらにここでも、マムルーク朝軍とイルハン国軍が衝突したアプルスタインの戦いについて、細かな検証が行われる。

バイバルスの死から第二次ホムスの戦い (680/1281年) に至る過程は、第八章「バイバルス死後の勝利：第二回ホムスの戦い」で述べられている。ここで著者は、バイバルス死後の内乱期をいかにカラーウンが制したかを述べた後、やはり第二回ホムスの戦いについての綿密な考証を行う。そして、実際にマムルーク軍を率いていたのはカラーウンであっても、この戦いでのマムルーク朝勝利の立役者は強力な軍事機構を築き上げたバイバルスであるという、アヤロンの説を引用している点に注目したい。

結論である第十章にはいる前に、著者は第九章「マムルーク朝とイルハン国の境界」で両国国境地帯の諸様相を概観している。まず初めに軍事的な事柄を述べ、次に戦時中の交易活動がどの程度なされていたのかを論じ、最後に主な巡礼者の移動に関して言及している。本章の記述はおおむね概略的であるが、政治史・事件史的記述が中心の本書の中ではめずらしく、民衆の生活のレベルにまで目を向けた記述であり興味深い。

以上のような分析をもとに、本書の結論部分をなす第十章「マムルークとモンゴル：概観」では、「なぜこの戦争は続いたのか、なぜマムルークはモンゴルを阻止するのに成功したのか」[p.214]という著者の二つの問題提起にしたがって両国間の戦争に検討が加えられる。まず本章第一節では両軍の装備と戦術の比較がなされる。高度に訓練されたマムルーク軍に比べてモンゴル軍は装備、戦術ともに劣っていたとするスミスの説に対し、著者は双方の軍隊にはそれほどの相違はなかったはずであると反論する。次に第二節ではシリアの地理的条件の限界をめぐる検討が続く。すなわち、数量的な検討によって、モンゴル軍の撤退や敗北はモンゴル軍の大量の軍馬を養うだけの牧草地、水がシリアには無かったためであるとするモーガン、スミスらに対し著者は、数量の再検討や、モンゴルが度重なる失敗にも関わらず繰り返しシリア進出を企てたという事実を挙げることによって彼らの説を否定する。最終節においていよいよ著者は自らの疑問に答えを出す。まず最初の疑問である両国戦争の続いた原因について、著者はモンゴルの持つ帝国イデオロギー、すなわち世界征服の観念に基づくモンゴル側の要因と、それに対するマムルーク朝側の反作用であるとする。そして第二の疑問、マムルーク朝の勝因については、1. マムルーク朝軍事機構の成立、2. スルタン・バイバルス個人の優れたリーダーシップ、3. マムルーク朝側がこの戦争をより深刻に捉えていたこと、4. イルハン国がキプチャクハン国などとの争いに忙殺されていたこと、5. イルハン国が西洋の君主との連携に失敗したことの5つを挙げている。

以上のように本書の構成は、第一章から第九章まででマムルーク朝－イルハン国間で生じた個々の出来事を分析し、ここで展開された議論にもとづき第十章で、両国の対立のダイナミクスを論じるという形になっている。マムルーク朝研究とイルハン国研究の双方の膨大な量の先行研究を踏まえ、さらにアラビア語、ペルシア語両方の一次史料を用いる著者の実証的態度は、十分に評価されるべきであろう。しかし、個々の分析の綿密さに比して、著者が最終的に導き出した結論には若干の物足りなさを感じざるを得ない。例えば、両国の対立の原動力を、専らモンゴル特有の世界征服イデオロギーという曖昧な概念に求めている点は、根拠としてはやや薄弱な感がある。さらに、マムルーク朝側の勝因については、個々の戦闘における兵力の大小やスルタン・バイバルスの個人的資質といった偶発的な要因、およびキプチャクハン国やヨーロッパ勢力との外交関係のような外的要因などを挙げるに留まっており、取り立てて新身のある説を打ち立ててはいえないと言える。以下、このような結論を導くに至った、本書における議論の問題点をいくつか指摘したい。

まず第一に、「マムルークとモンゴルはいずれも、広範なムスリム定住地域を支配するユーラシア草原起源の軍事エリートであり、よく訓練された騎乗射手の集団にそれぞれの軍隊の基礎を置いている」[p.2] というような、両者の同質性に重きを置く見方に問題があると言える。本書において著者は、装備・戦術の点でモンゴル軍がマムルーク軍に大きく劣っていたと説くスミスや、兵站学的に見て大量の軍馬を擁するモンゴル軍がシリア進出に失敗するのは必然であったと説くモーガンらの、両勢力の異質性を強調する学説を否定し、両者の類似性を前提として議論を展開しているが、このような態度は著者自身も述べているとおり、アヤロンの学説に負うところが大きい [p.45]。しかし、両者を同質とみなす議論を突き詰めていけば、偶発的な要因や外的要因こそが両国の勝敗を左右したという結論に落ち着くほかないのは自明である。こうして導き出された結論が、スミスの批判しているR.グルッセやS.ランシマンらによる伝統的な学説と似たものになっているのは皮肉なことである⁽²⁾。

次に第二の問題点として、上述の第一の問題点とも関連するのだが、著者の分析が両国間の軍事的衝突や外交的な接触を中心としたものであって、両国の統治機構の相違や、双方の支配領域における社会構造の差異にまでは及んでいないということが挙げられる。このような統治機構、社会構造に対する視点は、著者の掲げる「マムルーク朝—イルハン国戦争の政治・軍事史」という枠組みを超えるものかもしれないが、両国の対立は決して軍事的・外交的な局面のみにとどまるものではない。例えば、「ワーフィディーヤ」と呼ばれるマムルーク朝への亡命者がこの時代大量に生じたことや、双方の史料の中での相手国に関する記述が不釣り合いであることなどは、それぞれの国家内部の構造上の相違を十分に検討し比較することによってのみ説明可能となるのではないだろうか。

また統治機構や社会構造の比較という点に関連して、著者のイルハン国内部に向けての視線が、マムルーク朝へのそれに比べてやや乏しいことも指摘しておくべきであろう。著者のモンゴル史観、イルハン国史観については、モンゴルの帝国観念の過度の持ち上げとあわせ、十分に検討する必要があるが、この点に関してはイラン・モンゴル史の分野からの指摘を待ちたい。

以上問題点を二、三指摘したが、著者が打ち出した「マムルーク朝—イルハン国関係史」の視点は、今後さらに引き継がれていかれるべきであることに変わりはないし、本書がマムルーク朝研究者とモンゴル研究者との間に共通の土台を成立させた功績は大きい。13世紀後半から14世紀前半にかけて西アジアを二分して争った両国を比較・検討する視点は、単にこの

時代の西アジア世界を研究する者にとってのみ有用であるばかりではない。この時代以降、イルハン国の領域であるイラン＝イスラム世界と、マムルーク朝の領域である西のアラブ世界は、それぞれ全く異なった歴史を展開することになるが、このような前近代西アジア史全体を見据えた展望をもって、両国の対立を検討することもまた重要であると言えよう。

(Reuven Amitai-Preiss, *Mongols and Mamluks : The Mamluk-Ilkhānid War, 1260-1281*, Cambridge Studies in Islamic Civilization, Cambridge : Cambridge University Press, 1995, 272p.)

- (1) これらの先行研究に関しては、p. 3を参照。
- (2) J.M. Smith, Jr. “Ayu Jālūt : Mamluk Success or Mongol Failure?”, *HJAS.*, 44(1984), p.301, n.1.